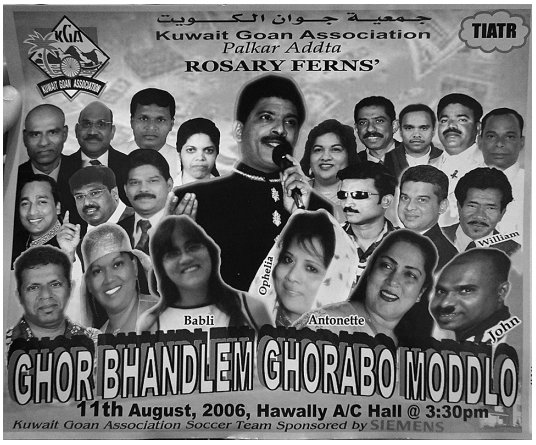
PROJECT

グローバリゼーションにおける文化的フローを統制する力

文
松川恭子

共同研究 ● グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究（2011-2014）

本共同研究は今年で最終年度を迎えた。これまでの3年間に10回の研究会を開催し、個々の事例の検討を行った。メンバー以外にも外部から特別講師を招聘し、日本における南アジア芸能の受容を考えるとともに、カリブ地域の芸能との比較を行うことで南アジア芸能のグローバリゼーションの特徴を明らかにしようとした。これまでの考察において、先行研究でも指摘されている南アジア系移民の世界各地への広がり、芸能実践者および観客が利用するメディアの多様化（Skypeによるレッスン、衛星放送チャンネルにおける視聴者参加型ダンス番組の普及など）、南アジア芸能を受容する国々における文化政策や助成金の存在などがグローバリゼーションを可能にする要因としてみえてきた。ただ、南アジアとはいっても、やはりインドの存在感が大きく、インド各地の芸能の考察が主であった。その中では、村山和之（中央大学非常勤講師）がインドとパキスタンのスーフィー芸能師および集団歌謡カウワーリーの考察において、コカ・コーラがスポンサーであるパキスタンの音楽番組「コーク・スタジオ」が全放送回を動画投稿サイトYouTubeで公開している点を指摘し、インド以外の南アジア地域の芸能に関してもメディアの発展を通じてグローバリゼーションが進展していることが確認できた。



クウェート在住のゴア・クリスチャンによる2006年当時のティアトル公演チラシ（Fidelis Fernandes氏提供）。

さて、これまで筆者は、本誌上で3回、共同研究の報告を行ったが、いずれにおいてもグローバリゼーションの中で芸能が世界各地に流通する現状とその背景について扱った。今回は反対に「グローバリゼーションにおける文化的フローを統制する国家の力」をテーマとしたい。

クウェートにおけるゴア・クリスチャンの演劇実践

石油が生み出す潤沢な富を有する湾岸アラブ諸国（バーレーン、クウェート、オマーン、カタール、サウジアラビア、アラブ首長国連邦（以下、UAE））には1970年代以降、移民労働者が数多く渡ってきた。UAEは人口の88パーセントが、クウェートは70パーセント近くが外国人で占められている「多外国人国家」である（細田 2014）。ほとんどの産業で外国人に労働力を依存するこれらの国々では、国民と外国人の間に明確な境界線が引かれている。外国人には国民との結婚などの特殊なケース以外は永住権や市民権が認められず、2年間の一時的雇用（更新は可能）を可能とするビザが発給されるだけである。雇用者がビザの身元引受人でもあるカファーラ（スポンサー）制度においては、ビザの有効期間内であっても雇用者の一存で労働者を解雇し、国に送り返すことが可能であるため、移民労働者の立場はつねに不安定である。それでも、自国よりはよい稼ぎを得られるため、南アジア、東南アジア諸国からやって来た多くの出稼ぎ者たちが建設労働や家事労働に携わっている。

湾岸アラブ諸国の政治・経済システムは、数の上では少数派である国民が圧倒的な力を維持できるように構築されており、移民労働者の文化的活動にも影響を与えている。外国人は血縁・地縁などの繋がりを持つ同じ国や地域出身者の間で生活ネットワークを形成し、文化的活動も限られた集団内で行う傾向にある。つまり、他国出身者や湾岸アラブ諸国の国民と交わり、たがいに影響を与えあう機会が限られているということである。そして、その状況を左右する大きな要因となっているのが、イスラーム法（シャリーア）である。UAEのドバイでは、メディア・シティ、インターネット・シティといったフリー・ゾーン内ではイスラームの原則が適用されず、検閲も行われない（Vora 2013: 45–46）一方で、サウジアラビアは個人の信仰の自由は認められていないというように、適応の厳格さの度合いは国によって異なるものの、イスラーム法に反し、風紀を乱すと考えられる実践を公的に行うことは、原則、湾岸アラブ諸国では許されない。そこで、イスラーム教徒ではない外国人が音楽や演劇といった芸能公演の場を持とうとする場合、各コミュニティ内部で小規模に行うことで、問題が起こらないようにするのである。

筆者は2014年2月にクウェートにて、インド・ゴア州出身の移民たちによる演劇実践についての調査を行った。彼らの大半がキリスト教徒（以下、ゴア・クリスチャンと呼ぶ）であり、ゴアで上演される彼らの演劇ティアトル（*tiatr*）の幕間に歌われる劇中歌カンタール（*kantar*）を中心とする音楽ショーや、ゴアから招聘したティアトル劇団の公演が毎年数回開催されてきた。クウェートでは、イスラーム法が定める道徳規律に反しないという前提で、コミュニティ内での信仰実践や文化実践については比較的自由な活動が認められてきた。その一方で、一般の劇場のようにクウェート人の目に触れる空間での演劇の上演には様々な制約が課せられる。脚本のアラビア語訳を添付した申請書を情報省に提出し、公演許可を得る必要がある。ゴア・クリスチャンのティアトル劇に限らず、外国人コミュニティのイベントはほとんどが学校の講堂での開催である。「学校行事の一環」として公的手続きの必要がないからである。元々、ティアトル劇は教会やチャペルの祭日に有志が集まって公演を行ったという経緯があり、現在もゴアでは村の教会の広場で上演されることが多いが、

クウェートでは教会で公演が行われることはない。

調査中にゴア・クリスチャンのアソシエーション関係者に聞いたところによれば、近年はコミュニティ内での音楽ショーの開催さえも自粛する傾向があるという。それは、イスラーム法の厳格な適用を主張する動きが 2012 年辺りから活発化したことと関係している。クウェートの憲法は信仰の自由を謳っているが、クルアーンにより認可されていないヒンドゥー教や仏教の宗教施設建設を認めていない。2012 年 2 月に正義（Al-Adala）派と自らを呼ぶ議会グループがキリスト教会をはじめとする非イスラーム教徒の信仰実践の場を、これ以上建設することを認めないとする法律を議会に提出した。この動きと歩調を合わせるように、レディ・ガガやブリトニー・スピアーズなどのアーティストの歌詞が、道徳上好ましくないとして CD の販売が禁止されたため、2012 年 2 月末に CD 販売の大手であるヴァージン・メガストアがクウェートから撤退した（http://www.arabianbusiness.com/virgin-megastore-pulls-kuwait-operations-store-close-end-feb-444522.html（2014 年 9 月 10 日閲覧））。このような動きに対して他の移民労働者のコミュニティがどのように反応しているか確認はできていないが、ゴア・クリスチャンのティアトル劇はキーボードやエレクトリック・ギターで構成される音楽バンドによる演奏など、西洋的な要素が多くみられるため、イスラーム法の適用厳格化に人々が敏感に反応したのだと筆者は解釈している。

マレーシアにおける舞踊実践

次にマレーシアにおける南アジア芸能の実践状況について、メンバーである古賀万由里（慶應義塾大学非常勤講師）がとくに舞踊に関して行った調査の内容を紹介し、クウェートのケースと比較してみよう。

マレーシアは 1970 年代以降、マレー系の人々の優遇政策（ブミプトラ政策）を進めるとともに教育分野におけるイスラーム化を推進した。この動きと歩調を合わせるように、マレーシア政府は 1969 年に芸能公演に対する干渉を始めた。1973 年にはラジオ・テレビの全番組に対する検閲が開始され、大衆の教育に相応しいと認められた芸能のみが放送されるようになった。ただ、その一方でマレー系以外に中国系・インド系の人々からなる多民族統合のひとつの手段として、芸能を活用しようという動きもある。国立芸術文化アカデミーの舞踊学部では 2005 年にインド古典舞踊のひとつ、バラタナーティヤムを取り入れ、マレー系、中国系の生徒も学ぶことができるようになった。バラタナーティヤムは元々、ヒンドゥー寺院に仕える女性たちの踊りである。このようにインド古典舞踊とヒンドゥー教との結びつきは強いが、マレーシア政府主催の公演でインド舞踊が披露されるときには宗教性は抑制される傾向にあるという。とはいえ、個々の舞踊家の場合、舞踊の宗教性を積極的に前面に出している事例もある。インド系舞踊家、カミニ・マニカンは、多宗教（キリスト教、仏教、イスラーム教、ヒンドゥー教）の融和を表現する創作舞踊を発表しているという。

文化的フローを統制する国家の力

クウェートとマレーシアを比べたとき、南アジア芸能の実践状況は大きく異なる。その違いは、それぞれの国の国民国家形成のあり方の違いに起因している。クウェート在住の南アジア系の人々は、他の外国人と同様に一時滞在者であり、国民国家の構成員ではない。クウェート人が外国人移民に求めるのは労働だけであり、宗教・文化的実践は各コミュニティ内部に閉じ込められる。そのコミュニティは国というよりは地域や言語を単位とするものである。たとえば、インドの場合、先に紹介したゴア以外に移民労働者の最大の送り出し地域であるケーララ州やタミル・ナードゥ州の人々がそれぞれアソシエーションを設立して文化的活動を行っている。一方、マレーシアはマレー系・中国系・インド系からなる多民族国家としての歴史を歩んできた。政府は多民族統合のシンボルとしてインド系の人々の古典舞踊を活用する。このインド系の人々の多くは 19 世紀に南インドからイギリス人経営のプランテーションで働くためにやって来た人々の子孫である。この違いの一方で、クウェートとマレーシアは、イスラームが支配的であるという点では共通している。そして、程度の差はあるものの、国家がイスラームの枠組みにおいて文化政策を行っている。

冒頭に述べたように、本共同研究では、人・もの・金・情報が自由に行き来するグローバリゼーションの進展過程で、南アジア芸能が国境を越えて幅広く受容されるようになる背景を主に探ってきた。ただ、本稿で紹介したクウェートの事例のように、流入する人と文化的フローを統制しようとする国民国家の力が強く働く場合がある。そのような力をすり抜ける形で、いかに南アジア芸能が人々によって実践されているかを探っていく必要があるだろう。

マレーシア政府観光局によって選ばれた舞踊団によるクアラルンプールでの公演。多民族（マレー、サラワク、中国、インド）の衣装を着ている。（2014 年 1 月、古賀万由里撮影）。

【参考文献】

細田尚美編 2014『湾岸アラブ諸国の移民労働者──「多外国人国家」の出現と生活実態』明石書店。

Vora, Neha 2013 *Impossible Citizens: Dubai's Indian Diaspora*. Durham: Duke University Press.

まつかわ きょうこ

甲南大学文学部准教授。専門は文化人類学、南アジア地域研究。著書に『「私たちのことば」の行方──インド・ゴア社会における多言語状況の文化人類学』（風響社 2014 年）、論文に「社会空間における舞台上の物語の共有／非共有──インド・ゴア社会における大衆劇ティアトルをめぐって」小松和彦還暦記念論集刊行会編『日本文化の人類学／異文化の民俗学』（法藏館 2008 年）、「インドにおけるポルトガル植民地支配と村落──ゴア州のコムニダーデ・システムの現在をめぐって」、田中雅一・奥山直司編『コンタクト・ゾーンの人文学〈第 4 巻〉Postcolonial ／ポストコロニアル』（晃洋書房 2013 年）など。